

供覽

勸業課長

大主任

正三年一月三日發行

報社

第廿四號

本號要目

●繰絲上の心得

碓氷社名譽顧問 萩原鏝太郎

●碓氷社の本領及び今後の方針に就て

碓氷社名譽顧問 萩原鏝太郎

●萩原翁衛生雜誌

編輯主任 小菅寅之輔

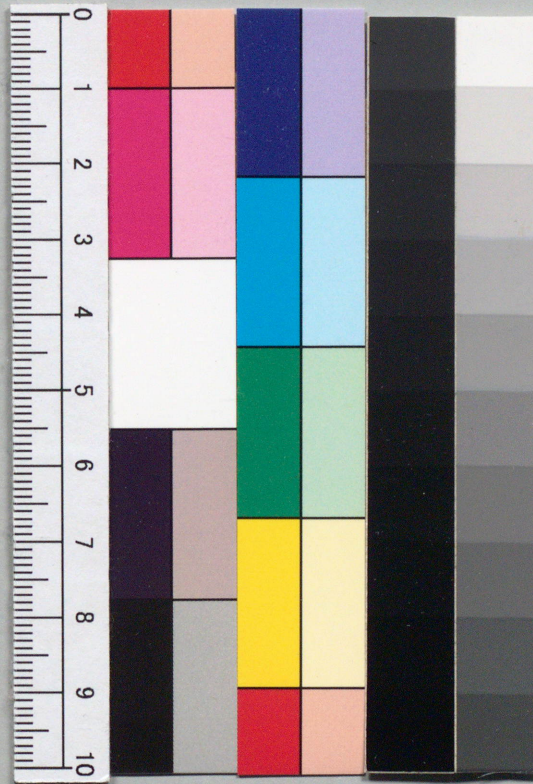
●埼玉縣内所屬組合懇親會

●各組揚場人員掛高

●製絲賣行一覽

碓氷社

L630
ウ



6639-7

蒸 汽 罐 諸 機 械
 水 道 鐵 管 製 作
 製 絲 附 屬 品 一 式
 鉋 金 製 バ ラ ブ コ ッ ク 類
 生 繭 乾 燥 器
 消 防 唧 筒 井 戸 唧 筒 各 種
 馬 鐵 客 車 貨 車
 建 築 橋 梁 鐵 材
 特 許 桑 刻 器 械
 製 作 販 賣

前橋市國領町八六

若 林 鐵 工 所

所 主 若 林 小 市

(電話四四〇番電器ツカ)

●御一報次第設計見積書拜呈仕候



蒸汽罐諸機械
 水道鐵管製作
 製絲附屬品一式
 鍍金製ラブコワク類
 生鐵乾燥器
 消防唧筒井臼唧筒各種
 馬鐵馬車貨車
 建築橋梁鐵材
 特許桑刺器機
 製作販賣

前橋市通町八六

若林鐵工所

主 若林小市



●御一報次第設計見積書并呈仕候



(照參事記) 念紀會親懇合組屬所社水碓内縣玉埼

繰絲上の心得

碓氷社名譽顧問 萩原 鐔太郎

編輯員曰く 大正二年十一月十四日當社所屬漆原組主催にて總社、明治、半田、駒寄、漆原の工女を駒寄村長松寺に集め講話會を開催す、此の日萩原名譽顧問は朝來の風雨にも拘らず七十一才の老軀を押して之に臨席し、二時間半に亘りて熱心懇切なる談話を試み、四百餘名の工女に多大の感動を與へたり、本編は其の大意を筆記したるものにして、當日の談話中省略せるもの夥しとせし讀者幸に之れを諒せよ

本日茲に親しく諸氏に面會し、平常抱く所の希望の一端を述べは洵に老生の喜びに勝へざる所である、老生は既に古稀の老年にも達し且つ近來益々病弱を加へたるを以て、昨春碓氷社の社長を辭退し、今日は顧問として體力の許す限り現任者を援助して居る次第であるが、願れば多年社長在任の當時に於ては諸氏の祖父さんやお父さん、又は兄さん達の親厚なる御援護に賴つて社業日を逐ひて繁盛の域に向ひ、尙ほ退職後の

今日に於ても多大の御同情御援護を辱うしつゝあるは老生の常に感謝して居る處である、斯く遠き以前より深き緣故を有し、現に吾が碓氷社の工場に勤勵されつゝある諸氏に對して一場の話を試みることは老生の衷心より欣びに勝へざる處である
併かし老生は未だ本邦一般に教育の普及せざる天保時代に生れ、殊に不幸十六才にして養父を失ひ、爾來村務上の事や家政上の事に追はれて之れぞと云ふ様の教育を受けることもなく、從て學問上の事柄に付ては諸氏に講話を試みるが如き資格を有たない、只だ碓

氷社の事業には明治十一年創業當時より今日迄三十餘年間關係して居るから、此等の點に付ては少しくお話し見たいこともある、故に今日は自己の経験を主として社業上に就て一場の話をしてみようと思ふ

良い絲を繰らうとするには、只だ煮方や繰方の方法を辨へ、眼や手が熟練さへすれば、夫れでよいかと云ふに決して然うでない、方法を辨へ熟練すると共に心の修養が肝心である、如何に方法を辨へ如何に多年の熟練があつても堅實なる覺悟が着いて居なければ決して精良なる絲を繰出すことは覺束かない、故に今日は主として此の方面の話をしてみようと思ふ

二

絲を繰ると云ふ仕事は随分苦痛のある仕事には相違ない、朝は夙より夕方は遅くまで働き殊に暑い時などは人の休む時でも休まずに働き、又た寒い時も決して樂なものでは無い、併し人間が世の中に生れた以上は何か相當の業が無くてはならぬ、業と名の附く以上

は却て世の中に樂な業と云ふものがあるものではない山の多い地方へ行くと婦人が薪を採つたり、草を刈つたり、随分劇烈なる労働に従事して居る、又た地方によつては婦人が耕作の業に従事して居るものもある、又た婦人が石炭や煉瓦の運搬などをして居るものもあり、其他紡績工場に従事して居るもの、紙漉場に居るもの、何れも随分骨の折れるものである、此等に比較したならば諸氏の従事して居る製絲業は遙に好い仕事にして女子に最も適當なる事業であらうと思ふ

斯様に人間は誰でも働かねばならぬ『労働を欲せざるものは餓死せよ』と云ふ格言のある通りであるが、偕て人は何故働かねばならぬのであるか、人は食ふて生きて居る爲に働くものに相違ないが只だ是ればかりが人間生活の目的全部ではあるまい、人には只だ食ふて生きて居ると云ふ以外に各々慾望と云ふものがある、此の慾望を満足させるのが人生の目的である、只だ生きて居るだけならば、健康を害さない限り如何なる粗食でも差支ない筈、寒さを凌ぐだけならば如何な

る粗服でも差支ない筈であるが、成たけ美味なるものを食ひ、人以上の衣服をも纏ひ、一家團樂して幸福なる生活をしたと云ふのが、人生の大目的である、故に此の程度を逸し所謂虚榮に陥ることを戒めた諺に人はパンの爲めに餓死するものに非らず、肥馬輕裘の爲めに餓死す

と云はれて居る程である、故に人は此の人生の慾望を達する爲に働かなければならぬ、其の働きの大なるものは即ち大に慾望を達することを得、其の働きの小なるものは即ち少しゝか慾望を達することが出来ないこととなる、若し自分の働きの以外に慾望を達しやうとすれば夫れは即ち前に云ふ虚榮と云ふ人生最も畏るべく慎むべきことに陥るのである

三

人は其の慾望を達する爲めに働かねばならぬ事は前述の通りであるが、偕て今日の世に處して人生の慾望を達し目的を遂ぐるには如何なる心得を以て働いたら

宜いかと云ふに、老生は先づ(一)有らん限りの智識を働かすこと(二)充分に手足を働かせること(三)誠實誠意に規律正しく働くこと、の三點を以て諸氏にお勧めするが、茲に最も肝要なることは『彼れも女子なり吾れも女子なり、人の爲すべきことは吾れも爲す』と云ふ精神を以て業務に當ることである『已れの家は貧乏だから如何せ駄目だ』『已れの家は舊から其んな家では無い……』とか『已れは子供だから……』とか云ふ様な卑屈な精神を以て居るのは最も甚だしき心得違ひであつて、自ら求めて不幸の境遇に陥る様なものである、今日の成功者なるものは、多くは貧困の境遇より立つて奮闘したものであるから、決して自ら失望してはならぬ

偕て智識を働かして仕事をする、精神を籠めて業務を執ることの大切な一例を述べんに、例へば製絲に就てもデニール、光澤、類節と云ふ様なことを常に八ヶ間敷く云はれる、サア此の時に之れは何う云ふ譯であるか、デニールは何せ不揃になるであらうか、光澤

は何せ悪かつたか、類節は何故出来たかと考へてみて之れを改良するの工風をしなければならぬ、是れが即ち精神を籠て仕事をする云ふのである

明治十一年確氷社創業當時に斯業に堪能なる専門家の説に『蘭一粒のデニールは世界を通じ大體に於て二デニール半(四百回)を以て普通とす、故に蘭四粒を以て十デニールの糸となる之を細とし、五粒を以て十二デニール半とし之を中細とし、六粒を以て太とし米國向き是れである、故にデニールは此の三様を以て何れも其の定度範圍に於て製絲すれば必ず世界各國機業の目的に副ひ需要のあるものである、只だデニールは中眞目的より前夜一ツ開きを以て限度とし其の開差の少きを最良とする』と云はれた、而して當社は元來米國向が目的であつたから、六粒附け十五デニールを以て方針とし其の當時の社則には『デニールは當分十五と前後一ツ半宛を部内絲とし其の他は渾て分外とす』云々と規定したものである、然るに其後本邦の蘭は養蠶飼育術の進歩と共に纖維が太く短く變化したもののか

殊に其の初と終りとは細く、中程に於て太く宛も山芋の如き状態となつたのである、而して此の絲綫の長さ及び太さは山邊海邊又は地勢や寒暖等に依り變化するものであらうと思ふ、故に自分の家の蘭は絲綫の状は何うであるか、之れでムラなく目的デニールの絲を繰るには何う調節して行つたら宜いかと、デニールは蘭によつて異なること及び前中後に依ての差異を研究して自ら工夫しなければならぬ、茲が即ち仕事に精神を入れや手の熟練が出来て始めて精良なる製絲を繰ることに出来るのである

四

次には頭を働かす例として水の一寸話してみやう、諸氏の工場に於ては何れも大きな貯水の裝置が置いてから用ふるものであるかの疑問を起さねばならぬ、水は一寸肉眼で見れば川の水でも井戸の水でも、

池の水でも大概は同じ様なもので、別に異つた處も無い様であるが、其の實水は色々な水質を持つて居る、即ち水の中には色々な物質を含有して居て、其の含有する處の物質の如何に依つて水質が變化するのである水は大體に於て硬水及軟水の二種に分ち、硬水とは水中にアルカリ性を含有するものを云ひ、軟水とは此等の物質を含有せざるものを云ふのであると聞いて居る而して製絲用水としては後に述べるが如く是非此の軟水で無ければならぬが、水は流れて居る間、又は溜めて置く間に日光に曝されて段々含有物が沈澱して硬水も軟水となるのである

高野の奥の玉川の水

と云ふのは茲である、之れ程靈妙な橋であるから悪事をした者は此の橋を渡ることは出来ない云はれ老生も其の當時は、不思議の感に打たれたが、今日文明の餘徳によりて、學術の發達したる思想より見れば此の川の水源には砒石の如き有毒なる礦物が在つて、流下するに従つて此の礦物が或は吸収され或は沈澱して、既に毒の無くなつた處へ橋を架け、之れを利用して衆生を饑饉せしめ善道へ導くの一助としたものであらうと思ふ、水は實に斯様に變化するものである

婦人が髪を洗ふに粘土を用ふる髪サラシする様に奇麗に油氣が取れる、之れは粘土中のアルカリ性分と髪の毛の油とが化合して逃げて仕舞ふからである、石鹼も其の通り石鹼中のアルカリ性分と身體の脂肪とが化合して去るから身體の脂や垢が取れるのである、之れと均しく若しアルカリ性分を含有せる硬水を以て製絲を行ふ時は、製絲の最も大切な蘭層及蛹體に存する脂肪が硬水中のアルカリ性分と化合して逃げて仕舞ふから、絲は白ボイザラ／＼した手觸の剛い絲となつ

て仕舞ふのである、斯様に地質により水が種々なる物を含有して居るから諸氏をして軟水を以て製絲せしめる爲めに大なる費用を掛けて装置してあるのが貯水池又は貯水桶である、諸氏は毎日の前にある貯水の装置を見るに就けても、常に製絲には脂肪が大切であるから之を逃さぬ様に云ふことを頭に置いて繰繰に従事しなければならぬ、斯くすれば手觸の柔軟にしてフンワリとした麗しい絲が出来るのである

五

前述の如く良い製絲を繰るには、繭層及び蛹體中に存する脂肪を保全することが最も大切である、されば殺蛹乾線の場合にも蛹に最も脂肪の豊富なる時期即ち上簇より七日目、八日目頃に於て殺蛹し、其の脂肪を保全するのが最も肝要なのである、斯やうに脂肪を保全し且つ前述の如く水質を精製して脂肪を失はぬ様に注意するのである、斯くまで注意するにも拘らず、繰絲場に於ける不注意の爲めに脂肪を含有したる繰湯を

徒らに逃がして仕舞ふことを時々見受けることがある諸氏の毎日用ふる繰鍋には底に水を拂ふべき穴がある之れは何の爲めであるかと云ふに脂肪は元來輕くして鍋の表面に浮ぶものであるから、鍋の上から水をこぼすと脂肪を失ふ、故に脂肪を失はないで鍋の中の汚水を流し出す爲めに底から水を排出するの装置となつて居るのである、然るに人に依ては此の大切な道理を構はず底から水を拂ふことを面倒臭いと云ふ様な考であるか、上からガシャ／＼溢して居るものを見る事が度々ある、是れでは折角殺蛹乾線に其の時期を撰んだことも、用水を軟水にした事も、殆んど所謂水の泡となつて仕舞ふでは無いか、茲が即ち頭を用つて仕事をすると否との別、要點である

茲に述べた處は用水及脂肪の説明としては餘りに簡短であるが、老生は決して今日茲に技術上のことを説明しやうとするのではない、技術上のことは他に當務の技術者もあり、教婦諸氏もあるから、此等の人々から常にお話がある事と思ふ、只だ老生は今日の社會

に立つて働くには常に精神を用はねばならぬと云ふ話の一例證として用水及び脂肪のことを一言した次第であるから、諸氏は單に用水及脂肪のことだけに注意すれば宜いと云ふのでは無い、製絲上の凡ての仕事凡ての場合に常に頭を用つて仕事を、精神を込めて物事を處理しなければならぬ、教婦其他から自分の悪い癖を直されても、克く頭を用つて其の譯が分れば直ぐに癖が直る、頭を用はないで只た手足だけ動かして居る人の癖は容易に直らない少しやつて見てもア、面倒だ……と云ふ様なことになる、癖を直すのは新に習ふより困難だと云ふのは畢竟頭を用はないからである

斯様に仕事に精神を込めて來ると、仕事上に色々の面白味を感じ、製絲業上諸種の發明發見等も出来る『發明は圖書館より生ずして工場より生ず』と云ふ格言の通り、物事の發明は書物上に於ける學理の究研から出来るものよりは、技術者の實地經驗に依つて起るものが多い、現に當社の各工場に於て使用して居る大梓留め支柱の如きも僅かに金三圓の懸賞に依

つて募集し不二組の職員某の考案に成つたもので、今日各組々に於て受くる處の利益は實に莫大なるものであるが、此等は全く工場に於ける實地研究即ち日々精神を入れて仕事をした賜であると言ふべきである

六

以上(三より五まで)に於ては精神を籠めて、智識を働かすと云ふことに就て述べたが、以下少しく働くに就ての心得を述べてみよう、先にも一言したるが如く働くには規律正しくするの一番肝要である、製絲とか紡績とか云ふ様な機械力を利用する處の工場の仕事は大概は規律正しく行つて居るが、其他に於ては随分遊んで居るのか仕事を居るのか分らない様なのが尠くない、諺に「光陰は無上の寶なり果して然らば光陰を費消するは無上の奢なり」としてあるが、全く此の通りである、刻苦して金持となつた有名な某成功者は常に『時は金なり』と云ふ格

言を座右の銘として居たと云ふことである
世の中の奢りと云ふことはお餅や餅を食ふこと計
りでは無い、時間を無駄にするのが一番の奢である、
世には襦袢半纏を着て草鞋を穿いて不味い物を食つて
夫で無上の奢をして平氣で居るものが澤山ある、長い
煙管に煙草を吹かして寝轉んで居る人民の如きは世界
無比の奢りをする人間と謂はねばならぬ
先年確氷社へ米國絹業協會長スキナーと云ふ人
が訪問されたことがあるが、此の人は米國に於て壯大
なる工場を有する大機業家であつて當社の製絲を澤山
に需要される、此の人が社を訪問された時に餘興とし
て土地の娘達を招き羽子返しと毬つきをしたのを非常
に面白がつて欣ばれた、此の紀念として毬の商標を拵
へ今現に使用して居るのであるが、此の人が一本數圓
もする高價な酒を取寄せて忽ち一ダース以上も飲んで
仕舞つたのを見た時は、實に其の奢りに驚いて居たが
其の時スキナー氏は懇切に案内せられた横濱の紫藤
生絲検査所長が其後米國に於て其の工場にスキナー

氏を訪問した時には、仕事着の儘で應待し紫藤所長へ
は椅子も出さなければ茶も出さない、夫れで談話は誰
人にも五分間以上はお断りすると云ふ事で、其の翌日
特に別仕立の瀛車で迎へられ、珍味佳肴を備へて歡待
されたと云ふことを紫藤所長から親しく聞いた事があ
る、紫藤所長の話に米國の工業家は人を招待する費用
の如きは更に吝まないが只だ時間が惜しいと云ふて居
るなどのことである、米國人の如きは洵に克く勤き克く
樂しむ人云ふべきである
吾々の學ぶべきは即ち茲である、勤くべき時には充
分米國流に働いて各自の慾望を満足させる、諸氏は充
分智識と手足とを用つて働らき、其の代りには偶には
東京見物に行くもよし、前橋に芝居見に行くのも決し
て悪くはない

七

元來確氷社は家庭的の工業であつて、從來の座繰絲
は勿論、今日盛に勃興しつゝある機械製絲も矢張り、

家庭を基礎とせる家庭的機械製絲である、家庭工業の

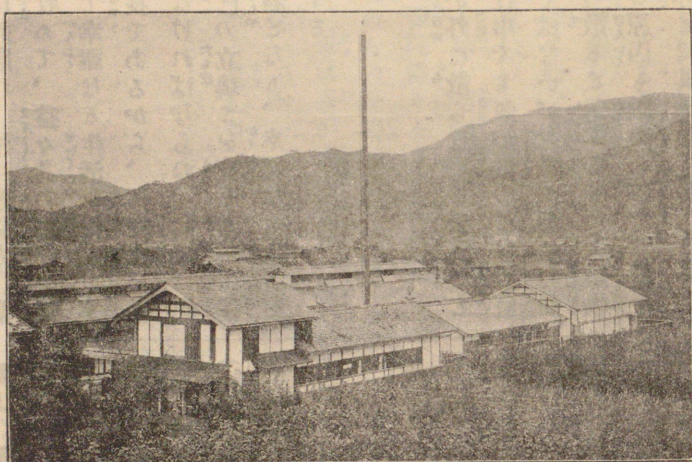
は益々甚しく、財産を有するものか又は相應の收入の

特長として、一家團樂の樂
しみを爲しつゝ仕事に従事
することが出来るのである
凡そ人生に於ける眞の快樂
は一家團樂の快樂に若くも
のほかい、或は男子がお茶
屋遊びをして酒を飲み藝妓
を買ふ、一時或は愉快と思
ふか知れないか

『赤鬼も書出しを
見て青くなりなり』

で、一時の樂しみは忽ち苦
しみとなる、而已ならず子
孫其他にも悪い響影を及ぼ
すこととなる

只だ今日吾々の最も憂慮
に勝へないのは、世が文明に進むに従ひ、貧富の懸隔



(景全組上野社氷確)

ある者は所謂文明の徳澤に浴すること
出來、尙ほ此の文明の利器を利用して益
々智識を研ぎ財産を得ることが出来る、
之れに反して財産なく又た身に相應の智
識技能を有せざるものは文明の社會に生
存することが愈々困難となる、其の極途
に親しき父兄の膝下を離れて他人に依つ
て僅かに糊口の途を求め、益と正月の外
父母の顔も見事の出來ない様な、憫れ
な生活をして居るものも尠なく無い、誠
に文明と云ふものは貧弱者の一家團樂
の快樂を奪ふものと謂はねばならぬ、貧
弱者は只だ現在に於て幸福なる生活を
爲すことが出来ない而已ならず、自己の
生活が不充分であるから自然其の子孫の
健康も不良勝ちとなり、其の教育も不充
分であるから、子々孫々に至るまで社會の貧者たり弱

者たるを免れない悲しむべき結果となる次第である
此の畏るべき社會の趨勢に適應し、相一致協力し業
務を齊一にし齊一の成績を収めて、益々其の結合を鞏
固にして、相當の收入を得て幸福なる生活を得んとす
るの即ち吾が確氷社の特長であるから、何處までも
家庭的を以て社の精神としなければならぬ、諸氏は此
の畏るべき社會の實情と自己の立場とを克く考へて子
々孫々に至るまで社會の強者となり、幸福なる生活を
遂げられんことを切に希望する

八

凡る良い絲を繰るには心が外に散らないと云ふこと
が最も肝要である、何んな仕事でも氣が散つては到底
も充分な仕事の出来るものではないが、殊に製絲の如
き精緻なる仕事に於ては氣の散ると云ふことが大禁物
である、婦人として氣の散る原因も數あらうが、就中
家庭の不和と朋友間の不和は其の最も著しきもので
あらう

去り狀の側でニコ／＼球數を繰り

と云ふのがある、意地の悪るい姑が無闇に家中を突き
廻はして、ワザと家庭に風波を立てさせ、愈々嫁は出
る夫は去り狀を書くに云ふ大騒動をさせて置きながら
『己れはモウ年を取つて何にも知らぬ、妾しが少しでも
口を出すに出来るのに入ると畏ろしいことだ、何うでも
勝手にするが宜い、妾は一日も早く阿彌陀様の御側へ
行くのが樂しみだア南無阿彌陀佛々々』と内心陰か
に家庭の風波を起し、嫁を苛めるのを樂みにして居る
又た嫁が夏、里へ客に來る、母は吾が娘の倘れた姿
を見て『お前何處か身體でも悪いのかい、大層瘦せた
か……』と云へば姑に苛められる悲しさを隠して『イ
エお母さん、夏瘦なんですヨ……』と答へて

うつと涙を拭く

夏やせと答へて後は涙なり

とは茲を云ふたものである

其の外女子は不淨なものであるから高山靈地へは登
れぬとか、正月や養蠶中は濫りに他家へ行つてはなら

元來婦人は一家平和の中心に立ち、夫をして内顧の
憂なく充分に活動せしむべき責任を有するものである
舊來吾が國の婦人は夫に仕へ又た舅姑に仕ふるに随分
骨を折つたものである、老生杯も最初は妻杯は奴隸の
如くに心得て醜遇したものである、又た有名なる女大
學と云ふ書物杯では七去の道と云ふを擧げてあつた、
(一)父母にさからふものは去る(二)子なきものは去る
(三)多言なる者は去る(四)窃盜するものは去る(五)多
淫なるものは去る(六)嫉妬なるものは去る(七)惡疾を
るものは去る、と云ふのである、又た其の去る即ち離
縁すると云ふことも尙に手輕なもので所謂三下り半即
ち『此者離縁候に付何方へ縁付候共相構ひ不申候』と
云ふ様な書面を叩きつけられ、其れで其の家を去ら
ねばならなかつた、此外尙は幼にしては父母に従ひ、
嫁しては夫に従ひ、老いては子に従ふと云ふ教へがあ
つた、之を三從の道と云つた
又た吾が國に於ける家庭の習慣として姑と嫁の折合
が悪い、川柳にも

ぬとか云はれたものである

昔弘法大師の母君は『如何に高野山が高山靈地で
あらうが如何に女人禁制であらうが吾が子の開いた山
へ登れぬ道理は無い』と云ふので途中まで登つた處が
火の雨が附つて來て、大師が袈裟を以て母君を蔽ふて
助けたと云ふ話がある、現に高野山には此の古跡とし
て袈裟掛け石と云ふのがある、之れ等は固より信する
には足らぬ牽強附會の妄説であらうが亦た以て當時婦
人の地位を知ることが出来るであらう

九

然るに今日の女子は男子と同等同位に立ち、一家平
和の中真となるべき家庭の大責任がある、夫は社會の
表面に立つて、所謂社會の百難と奮闘するのであるか
ら、常に之を勵まし若し不愉快の様子でも見える時は
特に之を慰めて

ムツとして歸れば門の柳かな

と云ふ様にしてやらねばならぬ、又た兩親に仕へ自己

の體力に注意して健全なる子女を擧げて之を教育する
と云ふことも固より婦人の大なる責任である、長い歳
月には不平なこともあらう、嫌なこともあらうが
氣に入らぬ風もあらうに柳かな
と云ふ様に自分の心を抑へて家庭の平和を圖つて行か
なければならぬ、例へば姑か昔風の人で八ヶ間敷いにも
せよ

親風を柳に受ける嫁の孝
と云ふ様にすれば大概家庭の平和は圖れるに相違ない
家庭の不和と云ふことは誰人の心をも亂れ勝ち散り
勝ちにするものである、殊に女子は神経の過敏なもの
であるから、一層家庭の不和の爲めには心も散り勝ち
になるものである、前にも述べたる如く絲を繰るには
心が散つては駄目である

然るに『今日姑さんに非道いことを云はれたとか』
『旦那が何うしたとか』小姑が意地が悪いとか『云ふ
様な事を想つて居ては良い絲の出来る筈がない
諸氏は將來家庭平和の中真となるの覺悟を以つて、

か、彼と云つたとか中間に立つて喧嘩の媒介をする者

がある、た譬の大きい杯は
生理上から云へば決して嫌
ふべき筈のものでは無い、
却て結構なことであるが、
外見の甚だ美しくないもの
であるから、東西を問はず
婦人の臀部の形の隠れる様
な衣服を纏ふて居る、故に
お臀の大きいと云ふことは
醜婦の代名詞として一般に
通つて居るから怒らすには
居られない、斯くて遂には
泣いたり、狂つたり、髪を
掻きむしつたり、袖を喰ひ
さいたり、と云ふことにな
る、殊に女子の多く集る製
絲所には動もすれば此んなことがありはせぬかと心配



(景内所絲製組上野社氷確)

克く家事に務め、心を安く平かに持ち良い絲を繰り、
以て一身の幸福一家の安全を得られねばならぬ
次に工場に於て言葉を慎むべきことに付て一言せん
に、元來吾が國の女子は沈黙を以て美德とし『沈黙は
女子の最も美しい裝飾なり』とまで云はれて居る、之
に反して西洋の婦人は最も克く喋べる、從來横濱往復
の汽車杯で時々西洋婦人と同乗した事がある、實に克
く引切りなしに喋べる、西洋では婦人の喋べるのを以
て美德として居ると聞いて居る、變な様であるが固と
西洋婦人は財産も有し男子に劣らぬ程の教育も受けて
居る、従つて其の言ふことが他を利し己を益する様な
立派な事柄である、然るに日本の婦人は動もすれば相
集まつて所謂井戸端會を開き、山の神や荒神様連中
が議長株になつて、頻りに人の棚卸しを始め、多く
は人を害し自分の爲めにもならない他人の秘事悪事を
喋々して居るのである『イヤ誰さんの腹がセリ出し
て來たの』と喋が出張つて來たの』と云ふ事を喋つて
居る、中にはイヤ誰さんが前回の事を何んど云つたと

でたまらない、況して吾が確氷社の製絲場は一般の製

絲場と異なり色々の階級の女子が集まつ
て居て自然妬みや疑ひも起りがちである
から一層言葉に注意して、互に親しみ睦
むことに心がけねばならぬ
斯んなことがあると女子の品位を傷け
女子としての本分の立たないのは勿論、
悔やしい、が繰鍋の中にフラ／＼して
居るから到底も良い絲杯の繰れる筈がな
い故に互に有益な話は何程してもよいが
人の噂や棚卸しは製絲場に於ては禁物
としなければならぬ、此點は殊に一言警
告して置く

十

偕て老生は以上に於て今日の社會に立
つて幸福なる生活を遂げ、人生の目的を

と、智識を働かす一例として、蘭のデニールの變遷、製絲用水、脂肪等のことを述べ、次に労働の心得に付て特に時間の尊重すべきことを述べ、次に當社の事業は家庭的工業なれば一家團樂の樂と相一致並行すべきこと、家庭の平和を圖るは婦人の責任なること、心の平和と製絲の品位との關係等に就て所感を述べたのであるが、凡そ話は只だ聞いただけでは何の効力もあるものではない

老生は元來福澤先生主義にて昔の女大學などは餘り信じない方であつたが、先日棚橋絢子先生の註釋に成

碓氷社の本領及び今後の方針に就て

碓氷社名譽顧問 萩原 鏢太郎

埼玉縣内當社所屬組にては別項記載の如く昨年十一月五日秩父郡野上村長瀬に於て聯合懇親會を開催し特に萩原名譽顧問の講話を要望せられたり仍て萩原名譽顧問は七十一歳の老齡且つ平常の病弱にも拘はらず之に臨席し二時間餘に亘りて最も熱烈なる講話を試みたり茲に其の大意を記述して一般社員の參考に資す(編輯員)

れる女大學が出版された、早速講入して一讀したが却々今の輕浮なる社會に適當と思ふ所が尠くない、其の中に斯う云ふことがあつた

百言は一行に若かずと、即ち百の言葉よりは一の實行の方が尊いと云ふのである、之れは洵に名言であると感じたが、諸氏も希くは只だ老生の話を聞いただけで無く、實地に行つて諸氏の幸福を進め一家の安泰を圖り、延て當社製絲を精良不欺ならしめ、以て其の聲價を高むるやう切に希望する次第である(完)

本日茲に親しく諸君に會し、平素懷抱する處の愚見の一端を述ぶるの好機を得たるは、老生の洵に光榮とする處である、老生も豫てより當地の發展せる社業の實況を見、且つ當地の風光にも浴したく思ひ居りしも、既に七十一歳の頽齡に至り、且つ元來の病弱にて身體意の如くならずして遂に今日に至つた次第である、然るに近來御當地社員諸君の同情益々厚きを加へ、最近に於て更に多數の御加入を得たるは、即ち當社の名譽と信用とを全うする所以にて老生の深く欣び且つ感謝する所である

本日は右光榮に對し聊か御參考の一助ともなる可き事を述べたいと思ふが、何分天保時代の生れにて、當時は一般に教育も普及せずして僅かに寺小屋教育を受けたる而已、殊に十六歳にして養父に死別し、直に名主役と云ふ様な名義を持たせられ、公務上の事や家計上の事に逐はれて、教育を受け研究を爲すべき暇も無く

今日諸君に申述べべき素案も無く甚だ汗顔の次第であるが、只だ碓氷社々業に關しては創業當時より之れが經營に參與し、又た社業の困難に當り明治十七年社業を主宰するに至つて以來、昨春退職に至るまで二十九ヶ年の間、引續き社業に従事したるを以て、斯業界諸先生の高説を承り、自ら幾多失敗の實驗をも重ねたれば、此等の點に付て聊か愚見の存する處を述べてみやうと思ふ

抑も碓氷社は明治十一年の創業にして、爾來茲に三十有六の星霜を重ねたる次第にて、當時生誕したるものは今や血氣の壯年となり、女子ならば主婦として一家を取締るべき年配となる、當社も亦た諸君の御同情御援護に倚り、斯業界に於ても比較的盛大なる域に立至り、今日の實況を一見すれば洵に創立以來無事無難にて茲に至りし如くなるも、創業當時に於ては非常なる困難を生じ、種々なる防害を受け、碓氷社に加盟したるものと、加盟せざるものとで感情を異にするが如き場合も出来、却々の難産であつた

其後は先づ普通に生育したが、矢張り人生と同様に瘡、癩疹等の流行病にも罹ら如き事ありて、明治十七年老生が社長の後任を繼ぐ當時の如き、實は多額なる負債を生じ爲めに社長の交送ともなりたる次第にて、其の原因は本邦不換紙幣濫發の結果、物價に劇變を生じたるを主とするが、當時に於ては未だ當社の基礎の鞏固ならざりしも一原因である、當時は只だ碓氷社に於て合同し整理したる生絲が在來の製造製絲に比して割高なりしと、經營の局に當るものが節儉、勤勉實に畢生の力を盡して其の面目を持し、利益増進に努めたのが唯一の特長にて、何事も未慣の事とて跪き易きことのみに多く、創業當時は一村内の吾々同志が主となり僅か百餘名の人員で漸く二十七個程を作つたのであつたが、今日は十縣下百八十六組、絲出來高約九千個近く賣上金四百五十萬圓に達するの域に至つたのである、斯やうに人生と同じく種々の艱難を経て兎に角比較的健全に今日の發達を遂げたのである

今日碓氷社の斯く發達したる原因とも云ふべきものを

數ふれば凡そ六原因である

- 一、一樣なる製絲を多量に製出すること
- 二、絲價の變動より來る危險の負擔を均分すること
- 三、社員間に於ける多大なる賣上金の融通上金利に於て貸借兩者に利益を與ふること
- 四、小製絲業者の團體大を加ふに従ひて比較的社費の減少を來し社員利益を多からしむるに至りしこと
- 五、自家に於て製絲に適良なる繭を收め之れを以て製絲を行ふこと
- 六、團結の力を以て一個人の力にては爲し難はざる事業を爲し得るの便宜を有すること

此の外にも尙ほ原因とすべきもの無きに非ずと雖も、以上六個は其の最も主なるものである、右六個の原因に就て茲に一々説明することは、到底不可能の事であるから此等は曩に出版したる『社業談』に就て御諒解を得ば本懐である、本日は六原因中の主要なるもの而已に就て一言しやうと思ふ

元來生絲の如きは多くは虚榮裝飾的に需要せらるゝものにして、生絲と云ふものが無くても別に差支ない様の物が多大なる價值を有し、特に其の價格の高低甚しきは一寸不思議の様である、老生が社業に従事したる二十九年間に於て、絲百斤即ち十六貫目に付僅かに五百餘圓で賣つたこともあり、又た千三百餘圓で賣つたこともある（五百餘圓に對して千三百餘圓は一倍六割に當る）尤も之れは數年間に於ける高低で、本邦貨幣制度の變更、世界に於ける金銀貨比價の變化、及び爲替相場を始め世界物價の高低にも關係するから、一概には言へないが諸物品中生絲の如く價格に高低あるは他に多く其の例を見ざる様に思ふ

之れは多年間に亘りての高低であるが、假りに一ヶ年間の高低に付て見るも、最近に於て明治四十年の如き一度は一千三百圓迄に進み、二三ヶ月の後には九百圓に下つたことがある、千三百圓に對する九百圓は實

に三割以上の下落にて假りに五萬圓の營業とすれば一
萬五千圓の違算を生ずる、故に明治四十年末の如きは
斯業界に大慘狀を呈したる實例もある、又た本年初業
より今日迄の高低を見ても、羽子板九百七十圓に始ま
り千九十圓に至り（其の内支那種は千百十圓に迄立至
つた）之れが七月より八月末に至つて斯様に昇騰し九
月に入りて下向きとなり、其れより以後は次第に下落
して前月下旬には千十圓となつて、僅かの間に一寸百
二十圓を奔騰し僅かの間に又八十圓近い下落があつた
之れ等も大畧一割前後の高低が四ヶ月間に行はれたの
である、此の期間に於て上向になつたときには何分の
利を得、下向になつた時は其利益を奪はれるのみなら
ず、賣却時期が悪くて昇騰期に少く賣り、下落時に
多く賣る如きことがあれば、小資本家の如きは之れが
爲めに多大なる打撃を被り、再び立つことの出来ない
様な境遇になるものもある
斯様な高下は何によりて來るか云へば要するに織
物流行の勢力に支配せらるゝものにして、絹物流行の

廢れて他の物品を以て之に代ふるに至るときは、忽ち顧みる者が無くなる云ふ状態であるから、絲價が俄かに暴落する、茲に奇な一例ではあるが、先年米國に於ては絹擦れの音の流行し、夜會等の交際場裡は勿論、市中の歩行にもキユウ／＼絹擦れの音がしなければならぬと云ふ時があつて、貴となく賤となく、猫も杓子もキユウ／＼させて欣んだ、之れが爲めにタヘタ即ち本邦の琥珀の如き裏地が非常に需要され、従つて牛絲の大需要を惹起したと云ふ事は、某大官が米國よりの歸朝當時、當社に於て親しく講話せられたる土産話である、之れ等は洵に奇なる一例であるが、只だ裝飾品としての外何等必要の無いものが斯る需要の變化を來たすは不思議の様であるが、事實は儘かに之を證明し、絲質の變動は主として茲に原因して居る様に思はれる之に反して米麥の如きは人生一日も缺くべからざる必要品であるから、最も高價にても然るべき様であるが之れには決して流行と云ふことがない、即ち今年米が流行するから澤山食ふとか、今年米が廢つたから

少し食ふとか云ふことは決してあるもので無い、社會に人類が多くなれば、多くなるほど米麥の供給も増して、世界を通じて甚しき凶年ならざる限りは、大概は需要供給の調和が行はれるから、生絲の様に價格の高底甚だしきことはないものと見て差支ない凡そ營業として常に人生に於ける需要供給の定度を保つて居るものは、大なる利益の無い代りには大なる損失の危険も無いものである、然るに生絲業の如き營業に在りては、之れを從業の實際に徴するに、其の浮沈の甚しきこと、他に多く其の例を見ざる處である、生絲事業で大成功を爲し、大資産家となつたものは、先づ皆無とも云ふべく、其の産を破り資力を減じて居るものは澤山ある、是れ即ち生絲業の性質が流行に伴ふ投機的にして、大なる危険の伴ふものであると云ふ證左である

三

倍て此の絲價高低の大原因たる流行と云ふことの根源

を考ふるに、抑も人が刻苦して金を溜めやうとするのは實に不思議の様であるが、元來人間は只だ食ふて生きて居ると云ふばかりが目的では無い、只だ食ふて生きて居ると云ふだけなら別に大した勞苦も要るまいが人間には食ふて生きて居る以外に多大なる欲望がある人は有ゆる艱難辛苦とも闘ひ、自分の欲望を満足させやうとして居るのが即ち社會の實情にして、又た今日の日進月歩を來たす根源である、故に勢ひの然らしむる處動もすれば虚飾虚榮の弊に陥り、自力收入以外の欲望を満足さうとするから古人の諺の如く『パンの爲めに餓死せずして、却て肥馬輕裘の爲めに餓死す』と云ふことになるのである精巧なる絹の織物を身に纏はずとも、美味佳肴を口に

も亦た無理ならぬことである、例へば吾が國に於て古來より珍重せらるる珊瑚珠の如きも、無瑕にして、珊瑚珠特有の桃色を有つて、且つ大きいのが尊ばれる、又た近來珍重せらるるダイヤモンドや眞珠の如き何れも人の愛し尊ぶものであるが、之れを髪に挿し之れを指に輝かしても、別に元來の不器量が美人ともならず脊の低い人が高くもならず、別に病氣が直ると云ふ譯でも無く、何等の効能もない様であるが之を身の飾りとするのは、畢竟自分は其れだけの働きを有し人に立ち越へて居ると云ふことを表示して心に満足するのである、考へて見れば不思議な様であるが實際世が文明に進むに従つて豪華を衒ふ爲めに裝飾的の品物も益々需要せらるる、是れが即ち人間の欲望である生絲の如きは珊瑚珠其他寶玉類等とは其の性質は異なる、裝飾品として人生の欲望を満足する爲めに愛せらるゝ點に至りては同一であるから、矢張りデニールが克く揃ひ、光澤がよく類等もなく如何にも美しく人目を惹く處の美麗なる織物となるを以て歡迎せらるゝの

である、生絲は如此性質のものであるから嗜好の變遷社會の流行の勢に依て、需要の盛衰價格の劇變を生ずるに至るのである、故に製絲業に従事する者は克く其の性質に危険の存する理由を考へ、安全なる道を求め堅固なる策を講ずるのが第一である

四

以上述べたるが如く、實に生絲業は恰も投機業と均しく、成功者少なく失利者多き恐るべき事業であつて、其の産出の如きも方今は殆んど本邦全體より産出せらるゝの情態であるが、從來は地方を限りての特産物であつた、斯くの如き性質の事業であるから實業者としては輕く本業に従事する事は大に顧みるべきことである、然るに當社の組織に於ては新絲事業より翌年養蠶前に至るまで一ヶ年を通じて約九千個を賣却するの組織にして、之れを順次成行きに賣るときは即ち九百七十圓にも賣り、千百十圓にも賣り、千十圓にも賣り、今日以後は高低何れかは固より不明なるも矢張り順次

収入があるから、結局同一である論する者もあるかも知れないが、從來の成果を按ずるに相場場の揚り際を避け愈々上りつめて今將に下り坂にならうと云ふ所謂危機一發と云ふ處で巧みに賣つて逃げる杯と云ふ事は神ならぬ身の到底出来る譯のものでない、且つ絲價が暴騰して意外の収入を得た時には忽ち生活の程度が變つて、妻君の帶となり娘のコートとなり指環となつて仕舞ふのが人情の常である、之れに反して絲價が下落したからと云ふて俄かに生活の程度を下す譯には行かない、却て絲價が暴騰し意外の収入があるのは家政紊亂を誘ふの本となるのが常である

是れ當社が其の始め微々として起り先進者諸君の賛同を得て現に三萬有餘の同盟者が三十餘年の經驗を経て最も鞏固に結束せられて居る所以である、當社へ加盟したる者も其の初は色々疑念も抱き躊躇するが如き向きもあるが其の味を熟知する時は自然此等の疑念も氷解するに至るのである

來二月頃までに賣却したるものを平均するのであるから、十ヶ年間を比較するも其の各自の收得金に於ては極端なる高低は無くツマリ投機的結果は免かるゝに至るのである、例へば横濱で九百七十圓に賣れば本社にある荷物も組に出梓絲の分も、又た戸々で線絲中の分も亦た賣價の分配に與かるを得るのである、即ち千百圓の時も、千十圓の時も均しく其の割合を均等に分配せらるゝのである、されば多年間引續き本社に出絲するものは絲價の變動より來る極端なる危険は免れ得るのである、社員達の立場より之れを考ふるも高價なる肥料を與へて桑を培養し、夜の目も寝ずに蠶兒を飼育して繭を得、更に之を製絲する等、實に多大なる勞力費用を掛けて得たる生産品が、高低常なき相場場の爲に支配せられ何程の収入を得らるゝか見當が着かね様では誠に危険千萬である、然るに當社の組織としては前述の如く多年間を通じて定度の収入が得らるゝのであるから、最も安全なる方法である、或は絲價の下落したるときに収入の少ない代りに絲價の高い時には澤山

五

且つ又た吾が製絲を多量に需要する處の米國邊の機家は非常に宏大なる規模の工場を有するから従て統一したる一定の製絲を多量に希望するのである、前年本邦に來られたアルバート・チルト氏と云ふ人は千二百の機臺を有し、二千百人の職工を役使し、多大なる織物を産出せられ、一日にも數十個の絲を費消すると云ひ又た去る明治四十二年當社に來訪せられたる米國絹業協會長 スキンナー氏の如きも裏地専門の機業家であるがパタソン河の西岸に壯大なる二工場を有し、之れ亦た多大なる製絲を需要する、此等の大機業家は本邦の製絲家は小規模小荷數で却て需要者の望を満足せしむる荷物を揃へ兼ねて居る、故に買入商館が之れ等に供給するには彼是れ稍々同様なる品種を取集めて商館の商標を附して送るのである、然るに近來追々製絲も發展し、小製絲家も大製絲家となるに至り、小

製絲家は近く其の數を減じ、大製絲場で一定せる多量の絲を出す様になつた、是れ即ち自然利害關係の然らしむる處にして本邦製絲界の霸王と稱せらるゝ某大製絲家の如きは一人にして多大なる製絲を製出して居る此等を以て見ても小製絲家は大きな機業家に應ずる事が出來ぬ、當社が今日一萬個近い製絲をなし、羽子板なり五人娘なり一様な製絲を多數に製出して機業家の需用に應じ得らるゝ故に當社の製絲の歡迎せられ益々價格の進むのは其の品種が世運の進歩と共に改良せらるゝのにもよるが、又た一には一様な製絲の追々増加するにも依るの明である、今日如何なる優良なる製絲でも一ヶ年に三百個や五百個の產出であつたら到底需要家を満足せしむることは出來ない、故に當社は均等主義を以て新加盟者の利便を圖り益々發展盛大を希望し、舊社員も新たに加入せらるゝ社員も皆同一なる損益を負擔するの主義で切に社運の壯大に至らんことを希望する次第である

又た前述の如き多大なる賣上金を利用し、之れより生

する金員運轉上貸借兩者に利益を與ふる如きは、變態的な銀行組織を有する譯である、又た社員が多數となり製出額が多くなり從て費用の分擔が減じ得らるゝことは、多年間の實踐により明らかである、又た製絲は工女の技術を主として機械の裝置、製絲用水の適否等は最も製絲の緊要點にはなつて居るが、之れに用ふる原料繭が適良且つ殺蛹乾燥等が適度に行はれなければ製絲が精良となり、利益を得ることに付ては餘程の遺憾がある、故に社員は自ら之れが爲めに實驗を重ね、適良なる繭を收むるの成果を得て居る、然るに繭のみを賣却して製絲の利害得失に關係せざるものは只だに繭價を收むるだけの爲に養蠶を飼育して居るもので從て此の良絲を得るには自己が繭を收むることが必要である、當社社員は此點に最も便利を得て居る、以上は社業談中の摘要であるが、詳細は拙著社業談にある只茲には簡単に御話した譯である

六

前述せる處は主として家庭工業たる座繰製絲に付ての觀察である、然るに近來時勢の要求とも云ふべきか、俄かに機械製絲勃興の氣運に向ひ、當社所屬組合中現に機械製絲所を有するもの百二組製絲所は百十六ヶ所、釜數は七千有餘釜となり、之れが經營資金は平均一釜六十圓と概算すれば實に四十二萬圓近き額に達する、是れ即ち米國が前年の恐慌以來製絲の需要を減じ、歐洲向の増加となり、即ち需要變遷の結果より茲に至れる者であらうと思ふ、故に此の傾向は謂はれ時勢の變遷でも云ふべきものである、最近まで本邦製絲の約六割以上は米國の需要であつたが、特に當社の座繰製絲は最も米國の需要に適合し、非常に好望せられたから、座繰製絲は著しき發展を遂げたのであつた、將來米國の需要にして從前の通りに回復せざる以上は、座繰製絲の前途は極めて望み少なきものではあるまいかと思はれる

元來文明の事業は分業主義を主として、所謂機械力によりて生産費を減じ然かも精良なる品物を產出すべき

ものである、是れに由つて之れを視れば當社の座繰製絲が漸次衰退して、機械製絲が勃興するは當然の趨勢であらうと思ふ、只だ當社の機械製絲は半ば工業的、半ば家庭的である、故に現今本邦大部分の機械製絲の組織とは頗る其の趣きを異にし、所謂家庭的分業經營とも云ふべきものである、故に一般の機械製絲とは同一視すべきものではない、普通機械製絲の組織は純然たる分業的基礎の上に立ち、工場を一個所に存し一定の規律の下に工女を訓練監督し、原料繭の如きも元は區々買集めのものなるも之れを撰別統合して稍々一様な原料とし、其他水質の一定等總て統一主義を以て製絲するが普通であるから、其の製品も一樣なるものを產出し、一事一物微細なる點に至るまで克く此の精神が徹底して、殆ど如何なる方面にも遺利を存せざるの如きに達して居る、普通機械製絲所に於ても純々キストラの如き精良なる製絲を製出するものあり、又た普通品を製出するものもあり、或は太あり或は細あるも、歸する處は損益計算の結果より茲に至るのである

近來本邦機械製絲所は年々非常の速力にて發展増加したるの結果、購買入の競争、又は工女の拂底等随分困難の状態にもあつたが、年々経験の爲め事業に熟練して居るから、其の打撃を被る點も少い譯である、只だ絲價の高低と云ふ點に至つては如何に熟練しても此點の苦痛は普通製絲の組織に於ては免れざる所である、之れに反して當社の如き家庭的集合工業に於ては固より競争の購買もなかるべく工女の如きも各社員家庭の女子之に當るを以て又た非常の利便を有し、殊に絲價の高低に對しては前述の如き特色を有し、其の危険を免るゝことが出来、尙ほ原料繭の適宜を得るの利便を占めて居る、然るに統一の一點に至つては頗る欠くる所あり、即ち工場的位置各所數里に隔たり居り、從て氣候風土を異にし、乾濕は勿論水質等も異なり、監督上に於ても一人の號令が一工場内に行き亘ると異なり、監督者は區々其の技倆を異にし寛嚴の程度を異にし、又た之れが當事者としては組合中の推薦によりて之に當るものにて或は經驗に乏しきものもある、勿論其の責

任は重大なるも、謂はゞ自己の利害では無いから、假令自己が希望しても危険を冒してまで、組合員の利益増進に奮闘せんとするが如き極度の動作は事情許さざる所にして、多くは多數社員に意を随ひ總て慎重主義を墨守し、其日其の日の安全を希望する如きが通常である、茲が即ち目下吾が製絲所として最も不備とし苦慮する點である

故に老生は從來此の經驗に鑑み、當事者に其の適任者を得、其の技能にも熟し、以て其の目的を達する様にしたと思ひ此點に關しては既に何回となく愚見を述べてある、即ち當業者に其の人を得て所屬百十餘ヶ所の製絲所が普通分業的製絲の如くに統一が出来、熟練が出来さへすれば、吾が機械製絲は將來に於て衰運に向ふが如きことは斷じてなく、益々繁盛の域に達するであらうと思ふ、併し此點は却々云ふべくして行はれるの事情も存して居るから各組一齊に當業者適任及び經驗と云ふことに力を盡すことにしたいと思ふ、若し萬一にも各組内に於て互に權力の争奪が行はれ、爲

に當業者の交渉を頻繁ならしめ、經驗を重ねるの暇も無く、抱負を行ふ事も出来ない内に、其の職を失ふが如き有様では到底良い成績の擧る筈が無い

尙ほ一ツ茲に吾が家庭的製絲場の不利益とする點は、其の就業期間が短く一ヶ年中僅かに五六ヶ月に過ぎざることは是れである、特に事業の始めと終りに於ては何分工女の欠員多く、從て費用にも無益なる點ある而已ならず、蒸籠其他器具の使用を殆ど半年間は止めて居る、蒸籠の如きは使はないで置けば却て腐損を速からしめ、多額の固定資本を要したものであるから、之れを一年中十ヶ月用ふると五六ヶ月用ふるとでは其の利子に於ても相違を生ずる、此等は當社の組織上差當り己むを得ざる所であるから、前述したる家庭的工業の特色を益々發揮すると共に、之れが欠點を補ふの策を研究して、奮進することが極めて肝要である

七

茲に當社機械製絲の盛衰に付て一言し、機械製絲所經

營者の參考の料に供さうと思ふ

吾々が明治二十年頃(凡そ廿四五年前)の考へは座繰業の如きは未開業の殘骸にて到底之等の事業が繼續すべきものでないとの考で、專業的工業を勧誘し今日の如き機械製絲を發達せしめんとし已に千金にも達した生物織り棒の下じきの假への通り明治四十年には總組數百二十四に達し機械組は僅かに十三組に減少した、爾來之れを鑑みるに自分が其の業に對する利害得失の研究未だ足らざる所あり、輕々企畫して時勢の米國向座繰製絲の旺盛得意時代なりしを以て、機械製絲と座繰製絲と大差なく、遂に不振に陥つたが爾來今日に至る迄之を繼續し忍耐刻苦奮闘したるの結果が今日の基となり、先導となつたものである、凡ての事業に困難の到來するは萬般の事業皆然り、故に此等今日の基となり先進者たる組に對しては相當の謝意を表すべきであると思ふ、爾來吾々は共に輕舉を戒め如何なる原因に依て盛衰を來たすかを査し、爾來機械製絲に對しては大に保護主義と云ふ思念に傾き、社費も比較的此

點に對しては厚きを加へて居つた、今日漸く此の不
公なる處理を明白するを得るに至れるが、之に反して
若し其の衰頹して今日の發展を見ざりしならば過度
に機械製絲所に費用を投じたるは闇から闇へ葬る如き
場合ともなりて、自分は暗々裡中の大罪人にて所謂闇
魔の窟へ出て審判の結果火の車に乗せられて劍の山に
登る如き思念に陥るかも知れない今日之れを明白して
諸君に訴ふるに至つたのは自分の精神上の満足は勿論
社業の爲め幸とする所である

八

偕て埼玉縣は養蠶製絲としては本邦中最も優秀なる地
方にして、殊に當秩父郡の如きは他に對して決して一
歩も譲らざるの發達をなして居る、吾が群馬縣の如き
三社の誕生地としては世間に知られ、又た長野縣の如
きは製絲の多量なる點に於て天下に鳴り、尙ほ福島山
梨の如き固より盛大であるが當秩父郡は機械製絲所と
しては未だ盛なりとは云ひ得ざるも産繭の美、座繰製

絲技術の熟達せる等の點に於ては此等に比して決して
遜色なきことを信じて居る、幸にして多數諸君の御同
情を得て、多數新組の加入を得たるは當社の最も光榮
とする處にして、之れが爲めに當社の名譽を高め、一
般の氣勢を揚げ、内外共に信用を得たる次第である、
御當地に於て本年新たに創立加盟せられたる十五組之
に從來の十九組を合せ都合三十四ヶ組となり、當社百
八十六ヶ組中の約二割を占め、一郡としては多い方で
ある、而して從來他地方に於て新たに加入したる組の
成果は其の初めは大概不熟練不整理にして吾々當事者
をして呆然たらしめたものも尠なくなつた、然るに
當地方の新組は非常なる良成績を収めて居る、之れを
從前の各組に比するも決して遜色なき而已ならず餘程
優良なる地位を占めて居る是れ畢竟當地方は既に多年
の熟練なる結果である
茲に至つて老生は特に改伸社のことを一言せざるべか
らず、老生も元來改伸社事務諸君とは、別して親交を
辱うし居たるに、不幸にして本年突然其の事業上に

九

支障を生ずるに至れるは、老生の最も同情に勝へざる
所である、思ふに組織上の結果自然茲に至りしものに
は非ざるか、而して本年新組の成績優良なるも亦た改
伸社の餘徳の茲に至らしめたるものたるは明かである
故に茲に老生は當地方製絲の優良なるは改伸社の賜な
り餘徳なりとして、多大の感謝を表するものである、
希くは當地方の諸君も改伸社の餘徳を永く遺忘せざる
の途を講ぜられんことを切に御勧めする次第である
斯くの如く當地方に於ては既に多年の歴史を有し、加
ふるに原料繭の優良なること決して他に劣らざる處に
して、且つ其の組數に於ても多數を得たる次第である
から、今後益々諸君が協力一致發展に努むるに於て
は尙ほ多くの發展を期し得られ様と思ふ、統計の示す
所によれば當郡の製絲合計は約三千個に達し内當社へ
出る分が約一千個であるから諸君の御盡力に依り益々
之を統合するならば、當地の蠶絲業は愈々盛大となり
殊に機械製系も追々經營せられ、前途有望なる形勢を
有して居るは實に御地の名譽である

尙は終りに臨んで一言するは文明日進は人生に於ける
欲望を満足すると云ふ結果、世業の百難と戦ひ之れに
打ち勝ち自己の欲望を満足するにある、之れが爲めに
次第に發明進歩して今日の盛運に至れるのである、從
前伊勢參宮は一世一代の旅行とも云ふべきであつたが
今日は伊勢參宮の日數で世界を一巡し得らるゝ時勢に
至つた、此等は人の智識の發達に原因することは茲に
喋々を要せず、而して此の文明開化の徳澤に浴するも
のは相當なる技能の研究を重ね、身に價格を有した人
か又は其の財産を有する人で之等の入々は洵に幸福な
文化の徳に浴し生計の美を味ふことが出来るか此の技
能も無く資力も少なきものは、此の文明の爲めに生存
することが次第に困難に陥る、之れが日進文明の結果
である、之れが趨勢は地方の實際を見れば洵に明瞭で
ある、地方民の生活難に立到り、最も樂しき一家團樂
の快樂も次第に破壊せられ最も親愛なる父母兄弟互に

相離散して人の爲に糊口の途を求め辛ふじて生存する悲惨の結果となる、此の時に當りて此等の幸福を全うするは此の家庭工業の如き者を發達するの目前の急である、と信ぜらるゝ、當社の今日あるも自然暗々裡に此等の趣味が知れた爲めである、又た吾々も飽までも當社の責任とし、又先進者として目的を貫き、社員に幸福を得て自己の子女をして他の製絲業に従事し自由を束縛せらるゝの身となる如き不幸に陥らしめざらん事を切望する次第である

一〇

諸君の御退屈も顧みず長喋舌をなし、定めて多々の御困難なりしなるべし、長く御忍び下されし段は深く感謝する次第である、前に述べた如く老生は斯る柄にもなきことに對し、申上た譯であるから説の主義も立たず、雑談に均しきものである、何卒此の點は宜しく御諒解下さることを希望す、尚ほ終りに臨んで厚く諸君に感謝することは老生も多年碓氷社に従事し、何

等の効果も無く才能は固より技能も無く只だ不器量でせうことなしの貞女かなの諺の如く一意専念社業に努めた迄のことであるが、著しき失態を現さず茲に至つたのは諸君の温かき御隆情に依つた譯である、當社が老生の勤きに依りて今日に至つたと云ふが如き意外過分の御稱賛を受けることもあるが、之れは當社が時勢に適應し順調に進歩したる結果で、申さば自分は好運に僥倖に遭遇した譯であることを毎に自覺して居る、如何に英才の士でも時の逆運に會ふ時は如何に努力奮勵しても却て悲運に陥るものである、然るに自分は僥倖にして今日光榮を負ふて昨春責任を脱して職を退きて多額の恩恵に浴し尚ほ名譽顧問の職を辱うするは偏に當社重役及各組長諸君其他、御社員等の御厚意により、此斯光榮を負ひ安全に老後を過す事に至つたことを今日親しく諸君に拜面の機會に於て謹んで感謝する次第である(畢)

萩原翁衛生雜話 (三)

編輯主任 小菅寅之輔記

△身体の健康は總ての事業の基礎であり、人生無上の幸福たるや言ふまでも無い、今や各種の工場等に於ても、衛生を云ふことには非常に重きを置いて居る、吾が碓氷社は普通の工場とは異なり、農家の家庭工業を以て基礎として居るから、従て普通の工場に於ける衛生法とは異なる、碓氷社に適切な衛生法が必要なる次第である

△本文は萩原前社長が多年の實驗に基き、碓氷社の社業に従事するもの並に農家の家庭に適切な衛生法の大意にして、讀者諸君参考の一助たるべきを信じての允許を得て茲に掲出することゝせり、幸に一讀の上、實行して翁の熱心なる志に報いられんことを冀ふ。(編輯員)

九

◎食ひ過ぎは害があるが食ひ足らないのは害の無いと

云ふことは、常人としては常に注意すべき金言である、食ひ過ぎは忽ちにして苦痛を感じるが、食ひ足らないのは、食を得るの途なくして已むを得ず食を廢するに云ふが如き極端なる場合は別として、普通人としては食ひ不足の爲めに害を受けるが如き場合はメツタにあるものではない

◎此の食ひ過ぎと云ふことも畢竟程度の問題で、身體を運動させない者が安りに大食すれば忽ち下痢を起すとか腸カタルを起すとかするものは必然の結果であるが労働を充分にする者は、如何に大食しても一勞動すれば忽ちにして消化する、故に喰ひ過ぎは害あるも食ひ不足には害なしと云ふが如きは、矢張り運動不足なる人の通辭とも云ふべきか

◎體量の如何によりても食物の量は異なる、體量十七

八貫もある人が老生の如き體量僅かに拾貫にも足らざる骨と皮ばかりの體のもの、同じ分量の食量を取つて居たならば、之れは食ひ不足となるが先づ普通には斯くの如き場合は滅多にあるものではない。

◎往時田舎に於ては大酒大食を爲すを馳走の一として年始客には難煮餅を強いて身動きもならぬ迄に強い附けるのが常であつた、又婚禮等には大酒を強ゆるのが例であり、且つ大酒を以て客の自慢として居ると云ふ有様で、先づ始めは小杯を以て頻りに強ひ、遂ひには末廣だからと云つて大杯又は吸物碗等を以て献酬を始める、一杯ものは數が悪いから二杯、二杯は數が悪いから三献と云ふ様に、言葉巧に強ひ附ける、又た客の方でも然らば瀧飲み杯と、大杯を兩手に捧げてドク／＼飲み干す、一同は手を拍つてた美事々々を囁し立てる、斯くの如く際限も無く暴飲するのを招待したる者も此上も無き面目として喜び、客も之を以て無上の優待として喜んだものである。

◎此の外祝ひごとをして人を招待する場合も今日より

は非常に多かつた、其の中に『庚申待』と云ふのが到る所に行はれた、即ち各地の十戸内外の小部落毎に庚申待の組があつて交互に其の宿をして晩食を供するのであるが、又た此の會が一種特別大食の會で、主人は客に大食させるを以て手柄とし、客も亦た大食するを以て義務と心得、十分に食つた以上一杯一杯又一杯と云ふ様に強ひ附ける、此の時は澤山食ふ人は其の中の優者として、何と無く幅が利くと云ふ譯である、此の庚申待と云ふのが大概毎月一回位宛はあつたものである、併し其の當時に於ては此の如き大酒大食も何等健康を害する様なこともなく、却て腸胃を強壯にした様に思はれる、是れ畢竟前述の如く運動が充分であつた結果に外ならぬ。

◎其後世の中は文明となり、諸事新規なる事が行はれ、醫術の如きも文明流になつて來て後或醫師の説に時として大食するのは胃腸の爲めには大効がある、開いて心窩かに自分の感念と一致したのに驚いた事がある、之れに依て見るも身體の運動さへ盛んであれば大

食も害とならずして寧ろ身體に活氣を添ふるの奇効を與へる、若し今日の運動の勢い人達が、昔の人の様に大食暴飲を取てしたならば、忽ち露者や看護婦の御厄介とならねばなるまい、之れは間接の一例であるが、また以て勞働の、如何に食欲を増進するかに解るでは無い。

◎昔の旅行は今日の如き交通機關の完備したる時代に於ては夢にも見ることは出来ない、昔の當時此の地方の商人は毎六サイ(月六回の市日のこと)前橋市へ出たものであるが前橋までは片道七里往復十四里、曉天の家を出で夜に入りて歸るのが常であつた、此の外富岡市へも下仁田市へも出かけるのであるから、旅行の運動は毎日の如くであつた、又た老生等も村用を帶びて往復十四里の岩鼻縣へ日歸り出張するのが常であつた、其の後群馬縣となり前橋に縣廳を設けられてからも道程往復十四里其の道路も今日の如きものではない、非常の悪路で、草鞋、脚絆に半合羽、笠を首に結び着けて往來したものである、此の當時に於ては飯も酒も随分多

量で先づ今日の倍以上であつたらうと思はれる、今の人でも勤勞を盛にする者は其の食量は矢張り多いのであらうと思ふ

一〇

◎老生等の少壯時代までは、四足(云ふ)を食ふと穢れと云つて獸肉は食はなかつたものである、只だ猪及び鹿の肉だけは稀れには食したものである、其の中鹿肉の如きは冷性の者が食へば身體が温まると云ひ、又た血の道の藥だとも云はれて居たが、之れを煮るには別の處で別の鍋で煮なければ穢れると云ひ、又た或る鎮守の氏子は絶対に獸肉を食ふことを禁せられたものもあつた、要するに獸肉は先づ食用には供さぬものとして居たのである、鳥肉は決して獸肉の如くに排斥はしなかつたが、之れとても今日の様に何鳥の肉でも食ふと云ふ次第では無く、雉子を婚禮に用いた位のもので其他は餘り用ゐなかつたのである。

◎今日の様に各種の獸肉を食つたり、牛乳を飲むと云

ふ様なことは夢にも知らなかつた、然るに横濱開港以來、牛肉だの牛乳だの盛んに肉食主義が行はれ「肉食」は其の味の美なる而已ならず、身體の營養には肉食が第一である、外國人が其の身體長大肥満、智識の卓越にして、大發明や大事業の出来るのは、全く常に肉食をする爲めである、日本人の如く穀菜主義の食物のみでは身體矮少、智識も劣り大事業も大發明も出来るものでは無い」この説が唱へられた

◎吾々は早呑込みに忽ち西洋化して、何んでも西洋主義に限ると急に古來の習慣を抛ち、洋服は第二次として肉食主義が最急務だと云ふ譯で、七面苦面して高價の牛肉や、鳥肉、牛乳、バターを盛んに食つたが、一寸始めは口に適する様でも、忽ち飽が來て嫌になり又生れて以來始めての品物だから胃や腸も大に驚いたと見て、時としては不消化の爲めに下痢を起しなごして、世間で持囃すほどの効能もなく、且つまた經濟の點に於ても小農家の肉食主義は到底事情が許さない◎茲に於て肉食主義の熱度も自然に衰へて來たが殊に

老生の身體には何分にも飽が來て嫌になり、心陰かに肉食主義も世間で持て囃す程のものでは無いと云ふ念も浮んだ、折から（今より十七八年も以前なりしが）陸軍藥劑大監石塚左玄先生の「食物養生長壽論」と云ふ著書が出來て、之れを一讀して肉食主義の誤れることを悟り自分の考が偶然にも石塚先生の説と適合したの驚いた、爾來老生は石塚先生の説に化し、穀菜を主とし肉類は單に補食に止め爾後益々其の説の適切なるを信するに至つた（未完）

埼玉縣内所屬組合懇親會

昨年十一月五日埼玉縣秩父郡野上村長瀬館に於て埼玉縣内當所屬各組懇親會を開催せり、當日の參會者は左記百二名、外に本社よりは萩原名譽顧問、眞下、小菅兩書記、木暮、中島兩監視人出席したり、午後零時半一同着席するや大澤理事は發起人を代表し「今日は埼玉縣内確氷社所屬組合の懇親會を開催するに當り多數諸君の御資同を得斯く盛大に開會するを

得たるは發起者一同の感謝する處なり、本日は此の機會を利用して平日吾々の敬慕する萩原名譽顧問に臨席を乞ひ一場の講話を依頼したるに高齡且つ病弱なるにも拘らず幸に快諾を得たり、願ふに製絲の業は一高一低最も至難の業なり、然るに萩原翁は拮据社業に奮勵す茲に三十餘年、遂に克く今日の盛大を致せるは吾々の常に感服する處なり、且つ吾々は單に事業上に於て翁を敬慕する而已ならず、個人としても其の崇高圓熟なる人格に無限の敬意を拂ふものなり、顧みれば明治二十五年の交、屢々横濱市場等の實況を見、當時吾々の經營せる龍門社の現狀を悲觀し、之れが改革を企圖せんとして、當時の龍門社長宮澤直藏君と共に確氷社を訪問し親しく萩原社長に面會して社業上の説明を聞き、斯る人格の人と事業と共にせば將來の成効疑ひなきを信じ、幾多の異論と戦ひ艱難を経て、龍門社を解體して確氷社に加入し、加入後に於ても種々なる困難に遭遇し以て今日に至り、最近新たに加入せられたる組々に於

ては種々なる困難續出する無きを保せず、此の際に於て多年の實験を有せらる、萩原翁の講話は、吾々が事業を經營する上に甚大の利益あるべきを信ずん

と開會の辭を述べ次で萩原顧問は二時間餘に亘り別項記載の如く講話を試みて聽衆に多大の感動を與へ町田商議員は參會者を代表して謝意を述べ、萩原顧問また之に應へて答禮を述べ、次ぎに大澤理事の發聲にて「確氷社名譽顧問萩原録太郎君萬歲」を三唱して講話會を閉ち、夫より長瀬の岸頭に於て園遊會を開催せり、全所は一名秩父赤壁と稱し、荒川の流れ水波靜かにして疊重たる奇岩怪石之れに枕み、風光の美云ふべからず、近年上武鐵道の開通と共に都人士の此處に清遊を試むるもの益々多く、秩父赤壁の名頼みに世人に喧傳せらる、時既に晩秋岸頭の紅葉靜流に映するの邊互に酒杯を交へつ、或は本年の成績を語り或は社業將來の計畫を談じ、宴漸く酣にして或は歌ふものあり或は舞ふものあり、歡聲湧くの如く、暮色漸く迫らんとする

に至りて一同散會を告げたり

田沼寅次郎 川田武平 武井關三郎
小林正作 今村森太郎 神田治作
大屋長重 染野堯好 大澤吾作
南園吉南 直三郎 石井卯平
新船新三郎 南六三郎 須賀仲助
大澤寅次郎 根岸八百吉 兩宮富藏
中部忠次郎 野村常三郎 染野民三郎
野原權一郎 野原代次郎 四方田民作
染野萬作 野村兼吉 根岸紋次郎
瀧上馬太郎 高橋百太郎 新井定三郎
宮澤良吾 林才作 田島儀三郎
中村惠三郎 淺見馬太郎 柳井彌七
古澤爲之助 持田久吉 武井榮作
林彌吉 淺見爲作 野村淺吉
常木彌太郎 堀口辰五郎 野口岡十郎
中庭泰五郎 高田忠五郎 出牛淺八
大島森作 羽鳥倉吉 笠原登吉
中篠仲三郎 出牛重郎 左衛門 大澤又吉

福島米三郎 山口七五郎 福島利助
坂本廣吉 瀨能幸作 堀口藤太
手島初藏 四方田勝次郎 榮仙吉
瀧澤德平 根岸彦三郎 長島保吉
若林淺次郎 田島定吉 田中國吉
持田勘次郎 若林由吉 根岸松次
關根新三郎 大濱龜作 橫田嘉助
町田嘉之助 飯塚馬之丞 關根今朝吉
富田忠七 倉林梁作 中里竹吉
田中忠藏 門平代次郎 中庭貞治
竹内作次郎 新井國松 福島隆策
山崎磯吉 内田善次郎 守屋宇作
高田翠次郎 磯田政一 山下儀三郎
原島孝三 松本金太郎 新井又四郎
黑澤喜作 黑澤瀧三郎 北太廉
黑澤鶴五郎 黑澤新助 高橋金太

各組揚場人員掛高

編輯員曰はく昨年九月分迄の人員掛高は前號に掲記したるが其の後九月分の到着したるものあり、九月分、十月分、十一月分を併せて茲に掲出せり、尙ほ未着分は次號に記載すべし

△人員掛高一覽表 (大正二年九月分)

組名	生絲仕上高	書記並ニ 雇員掛高	給料日 額平均
組名	生絲仕上高	書記並ニ 雇員掛高	給料日 額平均
名久田	二七、一八、五	一七九、〇	一五、四二
矢那瀬	七、三、五、〇	二一〇、〇	一六、五九〇
鳥子	七、九、五、五	七六、〇	一〇、五九四
槻川	六、九、二、五、五	二四、〇	一八、四九一
組倉	一、三、三、七、五	二四、七、〇	一八、五九〇
總社	七、三、四、七、〇	二五、〇	一五、六〇五
東細	四、〇、五、一、五	七二、〇	一七、五五〇
中瀬	一、四、二、七、〇	二八、〇	一九、五九〇
鷺東	一、三、七、〇、〇	二五、〇	一八、六四二
吾嬌	四、〇、〇、〇	二二、〇	二五、七四

△人員掛高一覽表 (大正二年十月分)

組名	生絲仕上高	書記並ニ 雇員掛高	練一貫匁 二付き人	練一貫匁 二付き人	給料日 額平均
北豆	二、五〇、五	五四、〇	一五、四	三、八五七	二、五四
大内	二、七三、五	六二、〇	二、三	六、九六	三、〇〇
太田	二、〇〇、〇	三九、〇	一、一	四、八	三、七
萩川	四、二、四、〇	四七、〇	一、一	三、〇九	二、七七
組倉	一、四、七八、五	二八、二、五	一、八	五、四八	三、〇〇
鮑馬	二、四、〇、三、六、〇	三〇、九、〇	一、三	四、八四	三、七七
三國	二、六、九、四、〇	一六、七、〇	一、三	四、一八	三、二七
小野	五、二、〇、〇	八四、〇	一、六	六、四〇	四、三
小平	三、五、一、五、〇	七〇、〇	二、〇	三、〇	三、二四
箱島	三、七、六、〇	一一、〇	一、八	五、七六	三、三八
宮上	六、七、〇、〇	九、〇	一、四	四、〇六	二、九
小野上	一、五、一、五、〇	二〇、〇	一、三	三、七二	二、六六
金島	一、九、四、八、五	二二、〇	一、一	三、四二	三、三
福嶋	一、五、六、二、〇	一八、四、〇	一、七	四、七四	二、七七
美和	一、五、五、八、〇	二四、〇	一、二	三、七九	三、三
原谷	五、九、六、五、五	九〇、〇	二、三	八、九六	三、九

長尾	二九、〇〇〇、〇	四四、〇	一、六	、四九一	、三三
三島	五九、八九〇、〇	七三、〇	一、三	、三七七	、三八
箕輪	二五、七四五、〇	二七、〇	一、六	、四五七	、二七八
早瀬	八六、七七一、〇	一五、〇	一、八	、六九〇	、三六七
間仁田	一三、七四一、五	一九、〇	一、四	、六二〇	、四三七
久呂保	四八、七九〇、〇	八六、〇	一、八	、四七六	、二七〇
大正	六三、〇〇〇、〇	八〇、〇	一、三	、四六五	、三六六
扇城	一九、〇〇〇、〇	二六、八〇	二、五	、七六六	、二九〇
倉淵	二二、九一〇、〇	二六、三〇	二、二	、六六五	、二九五
堺上	四二、一七四、〇	七五、〇	一、八	、六八九	、三六七
阪上	六二、七八〇、〇	一四、〇	二、一	、六三三	、二九七
上里見	八二、二九五、五	一八、〇	二、二	、六四〇	、二八九
岩嶋	一四、六四〇、〇	一六、九〇	一、八	、三三五	、二七六
中瀬	一七、五五二、〇	三〇、〇	一、七	、六二二	、三七二
白精	四二、五八五、五	八〇、五	一、八	、五五三	、三三三
清倫	三三、九八一、五	三八、七〇	一、六	、五五五	、三三六
中里見	一三、〇一〇、五	一四、〇	一、三	、九一四	、四〇三
川田	九五、二〇〇、五	二五、〇	二、二	、六三三	、二七六
總社	一四九、七〇〇、〇	二四、七〇	一、四	、五五三	、三九一

名久田	一七〇、四九四、〇	三三、〇	一、三	、三五四	、二七二
神山	一九、五八〇、〇	二〇、九〇	一、八	、五五四	、二六六
北九十九	一八、六二七、〇	二九、〇	一、六	、五五六	、三五七
荒川	一八、八九六、〇	二五、〇	一、四	、四四四	、三三〇
武甲	一四、二二三、〇	一五、〇	一、三	、四四七	、三四〇
野口	一三、六八四、〇	二七、〇	一、三	、八八五	、二八〇
板鼻	二五、二六七、五	三三、〇	一、六	、五八九	、三七五
小鼻	四、三九九、五	二〇、〇	四、五	、一六〇〇	、三五〇
辨天	二五、三〇〇、〇	五四、〇	二、一	、七八六	、三八八
南橋	五二、七七五、五	一〇五、〇	一、七	、七四一	、二〇七〇
島子	一六、〇六五、五	二七、七	二、〇	、四九九	、四一八
鍋南	二五、六四〇、〇	三四、〇	一、三	、四八四	、三五五
野殿	一五、九一九、〇	一〇八、〇	一、八	、五八七	、七六八
東飽馬	二四、〇〇〇、〇	三八、〇	一、六	、五〇〇	、三〇九
東細野	五、三九五、五	八九、〇	一、六	、五三〇	、三二〇
大谷	八三、五八〇、〇	六八、〇	一、八	、五五一	、三〇九
湯野	二、九〇二、〇	五五、〇	二、六	、一二五	、四七一
東九十九	二〇、五〇九、〇	一九、一五	一、四	、六七一	、四八二
豐岡	八八、五五五、〇	一八、一〇	二、〇	、五五〇	、二六九

鷺東	一五八、〇〇〇、〇	二八、七〇	一、八	、六四六	、三五六
吾婦	五七、七九一、五	一四、二〇	一、九	、五五〇	、二九〇

△人員掛高一覽表 (大正二年十一月分)

姓名	生絲仕上高	書記並ニ 雇員掛高	練一貫 二付キ人 員掛高	練一貫 二付キ人 料掛高	給料日 額平均
久呂保	一〇三、八三五、五	二〇三、五	二、〇	、六三二	、三三〇
小野上	二、八三五、〇	一五〇、〇	一、三	、三九〇	、三〇〇
太田	一五、二六九、〇	二〇一、〇	一、三	、四九八	、三七五
上里見	五〇、九八七、五	一三五、〇	二、六	、七四三	、二八二
箱嶋	四四、五〇七、〇	一六、〇	二、六	、八三三	、三三〇
荒川	一四、一五〇、〇	二五〇、〇	一、四	、四五六	、三三〇
萩川	七、四〇〇、〇	一八、〇	二、四	、七六六	、二九四
扇城	七、〇〇〇、〇	一八〇、〇	二、五	、八二〇	、三三〇
白精	二、七〇〇、〇	三二、〇	二、七	、九七〇	、三六六
吾婦	二九、〇二五、〇	一〇一、〇	三、五	、一〇三〇	、二九四
金嶋	三三、七七一、〇	一六七、〇	一、二	、三九七	、三三〇
三國	一〇、七八〇、〇	一四四、〇	一、六	、四九〇	、三〇七
大内	五、〇六六、五	八、〇	一、六	、四九〇	、三〇〇

南橋	四四、〇〇〇、五	九八、〇	二、三	、八八一	、一九〇
中瀬	二八、八五〇、〇	二二、二〇	二、〇	、六九九	、三九
北九十九	七五、四六〇、〇	一七〇、一	二、三	、八七四	、三八八
阪上	三三、八八五、〇	一〇〇、〇	四、四	、一四六五	、三三五
長尾	三九、〇〇〇、〇	四三、〇	一、七	、五三三	、三二〇

舊來より萩原翁との親交厚かりし磯部嶺泉旅館鳳來館主大手萬平翁は舊臘左の一首を萩原翁に寄せられたり

萩原君永く確氷社々長として製絲改良に苦心の結果をよめる
確氷社に心盡しの甲斐ありて
世界に誇る娘さなる

大手八十五翁

▲投稿を歓迎す▼

蠶絲業上に關する投稿を歓迎す
蠶絲業上に關する通信を歓迎す

▲通信を歓迎す▼

製絲賣行一覽

(十月廿九日より十二月十三日迄)

本年度十月二十七日迄に賣却の分は前號に掲記したり
仍て茲に九月二十九日以後賣却の分を掲出す

▲座繰製絲の部

月日	商館名	個數	百斤價格
十一月四日	三井	一九	九六五
十一月七日	全	一九	九六〇
十一月十三日	生絲會社	一九	九八五
十一月廿六日	三井	一九	九六〇
全	二六四番	三八	九八五
十二月四日	三井	一九	九五〇
○五	人娘	一九	九四五
十一月四日	三井	一九	九四五
十一月七日	全	四七	九三五
十一月廿五日	全	一九	九三〇
十一月廿七日	二四六番	二八	九三五
十一月四日	三井	一九	九二〇

十二月十三日	全	三井	一九	九三五
		生絲會社	五七	九三五
	○二	人娘		
十一月七日	三井	一九	九二五	
十一月十二日	全	三八	九四〇	
		生絲會社	三八	九四〇
		秋		
十一月廿五日	三井	三八	九二〇	
十二月四日	全	三八	九一〇	
十二月八日	一六八番	一九	九〇五	
	一八三番	一九	九〇五	
十二月九日	三井	三八	九〇〇	
	一八三番	三八	九〇〇	
十二月十三日	全	三八	九二五	
		生絲會社	一九	九二五
		票		
十二月九日	三井	一九	九〇〇	
十二月十三日	全	一九	九二五	
	○金	紅葉	三八	九一五
十一月七日	三井	三八	九一五	

十一月十二日	生絲會社	一九	九三五
十二月四日	全	一九	九〇〇
十二月九日	三井	三八	八九〇
全	二四六番	一九	八九〇
十二月十三日	生絲會社	三八	九一五
○赤	楓	一九	八九〇
十二月九日	三井	一九	八九〇
○山	東	一五	八八〇
十月廿九日	和賣	一三	八四〇
十二月十一日	和賣	一三	八四〇

▲機械製絲の部

月日	商館名	個數	百斤價格
十一月四日	二四六番	三八	九九〇
十一月五日	生絲會社	五七	九九〇
十一月八日	全	三八	九八〇
十一月十日	甲九〇番	一九	九八〇
十一月十一日	全	三八	九九〇
十一月十三日	生絲會社	七六	一〇一〇

十一月十九日	生絲會社	三八	九九〇
全	二四六番	一九	九九〇
十一月廿六日	二四六番	一九	九八五
全	二六四番	三八	九八五
十二月三日	全	三八	九七五
十二月四日	三井	三八	九七五
全	二四六番	三八	九七五
十二月十一日	全	二四六番(別口)一七	九六五
全	(支那種)三二	九六〇	九六〇
○結	票	二八	九七〇
十一月四日	二四六番	一九	九六〇
全	秋	二八	九五〇
十一月十日	三井	一九	九九〇
十一月十三日	生絲會社	五七	九八〇
全	甲九〇番	一九	九七〇
十一月十九日	生絲會社	一九	九六〇
全	二四六番	一九	九六〇
十一月廿二日	三井	一九	九六〇

十一月廿六日	二四六番秋	一九五〇
十二月三日	二四六番秋	一九四〇
十二月四日	三〇井秋	一九四〇
十一月四日	〇歌 留多	九四〇
十一月十日	二四六番秋	九四〇
十一月十九日	全 井	九三〇
十一月廿二日	二四六番秋	九四〇
十一月廿四日	全 井秋	九四〇
十一月廿六日	全 井秋	九三五
〇提 燈	二四六番秋	九三五
十一月十一日	二四六番細	九七〇
十二月十三日	甲九〇番春	九七五
全	秋 一六	九六五

△廣告の依頼に應ず▽
◎本誌は蠶種業者其他蠶絲業に關し彼我の利益を目的とする者に限り廣告掲載の依頼に應ず
◎廣告料は印刷費及紙代として當分左の通り相定む、但し三回以上は相當割引す
▲表紙裏並に裏表紙一頁一回金五圓 ▲裏表紙中一頁一回四圓 ▲普通金一頁一回金參圓

大正二年十二月廿八日印刷
大正三年一月三日發行

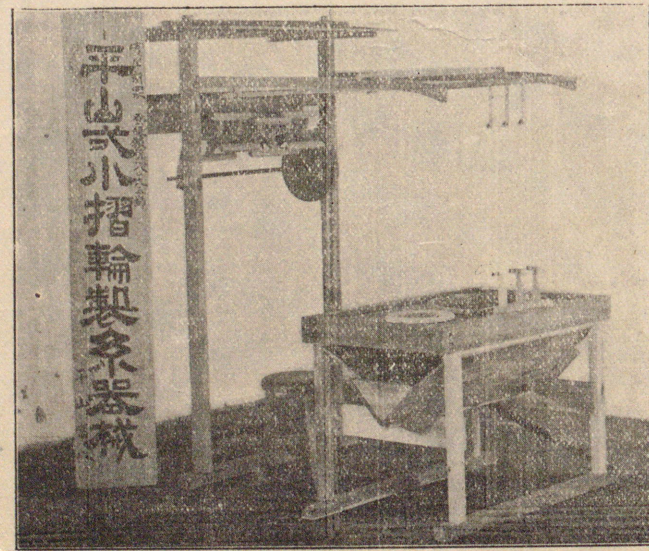
著作兼發行人 小菅寅之輔
印刷人 飯島代太郎
印刷所 群馬縣高崎市田町六十九番地 成立舎支店
發行所 群馬縣確氷郡磯部村大字 原市村三百六十四番地 有限責任信用 確氷社 販賣組合聯合會

製絲器械及木製諸器械一式製造販賣

平山式小摺輪製絲器械 平山富八

私儀多年諸器械製造ニ從事仕リ居リ候處各地諸君ノ御引キ立テテ蒙リ日増シニ繁榮ニ趣キ候段奉深謝候尙最近製造ノ確氷社所屬組合ノミニテモ左記ノ通りニ御座候
元組、東九十九組、碓源組、中瀬組、下里見組、澁藻組、柳瀬組、盛立組、晃明組、原町組、明治組、間仁田組、倉淵組、鰻橋組、藤澤組、本泉組、久留馬組、妻沼組、中川組、尾島組、花園組、折原組、大里組、笠間組、橘組、岩島組、中里見組、出牛組、武甲組、武西組、野上組、十文字組、南橘組、其他各地、數十ヶ所、以上

今同積中苦心ノ結果茲ニ平山式小摺輪製絲器械ヲ發明仕リ各所ニ取付ケ御試験ヲ願ヒ候處意外ナル好成績ニテ目下多大ノ御注文ニ接シ居候何卒續々御下命ノ程幾重ニモ希望候



●生絲仲次●

△確實なる

仲次商は

無給の手代なり

△信用ある

仲次商は

安全の代理なり

△真正なる

仲次商は

商界の機關なり

●生糸仲次●

本店

信州

岩村田

(電話長二番)



星野商店全景

高崎市停車場前

(電話百十番)

星野正三郎